

甲 第 号

深田 文裕 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

論文審査の要旨及び担当者

	委員長	教授	杉江 和馬
論文審査担当者	委員	教授	笠原 正登
	委員(指導教員)	教授	鶴屋 和彦

主論文

Differential impact of glomerular and tubule-interstitial histological changes on kidney outcome between non-proteinuric and proteinuric diabetic nephropathy

糖尿病性腎症における，尿蛋白量と，糸球体および尿細管間質の組織学的変化が腎予後に与える影響の関連性

Fumihiro Fukata, Masahiro Eriguchi, Hiroyuki Tamaki, Takayuki Uemura, Hikari Tasaki, Riri Furuyama, Masatoshi Nishimoto, Takaaki Kosugi, Kaori Tanabe, Katsuhiko Morimoto, Keisuke Okamoto, Masaru Matsui, Kenichi Samejima, Kazuhiko Tsuruya

Clinical and Experimental Nephrology 2023 Nov 29 Online published

論文審査の要旨

本研究では、腎生検を実施した糖尿病性腎症 396 例を対象に、腎組織病変 [糸球体病変 (GL)、間質線維化および尿細管萎縮 (IFTA)] と腎予後の関連性を蛋白尿 (≥ 0.5 g/日) の有無別に検討した。IFTA は蛋白尿の有無に関わらず末期腎不全の発生に関連することを示した。また GL は蛋白尿陽性群でのみ末期腎不全の危険因子である一方、IFTA が尿蛋白の有無に関係なく腎予後の危険因子であることを明らかにした。本研究成果は糖尿病性腎症の生命予後を考慮する上で、予防医学の観点からも画期的な結果であり、今後の発展も期待される。

公聴会での質疑応答では、尿細管障害における糖毒性の機序や IFTA が起こる尿細管の部位、IFTA の 25%のカットオフの妥当性、腎生検のサンプルエラーの可能性について、本結果を踏まえ丁寧に回答された。また、腎生検に代わる無侵襲の検査法や IFTA 予防に関する将来展望については、実臨床での有用性と自らが有する研究構想を具体的に説明された。さらに経時的に悪化する糖尿病性腎症症例の原因機序に関する質問にも、本研究成果を用いて的確に回答された。

以上より、主論文の内容と公聴会での質疑、および参考論文と合わせて、審査委員すべてが適と判断し、博士 (医学) の学位に値する研究であると考えます。

参 考 論 文

1. Utility of serum β 2-microglobulin for prediction of kidney outcome among patients with biopsy-proven diabetic nephropathy.

Takayuki Uemura, Masatoshi Nishimoto, Masahiro Eriguchi, Hiroyuki Tamaki, Hikari Tasaki, Riri Furuyama, Fumihiro Fukata, Takaaki Kosugi, Katsuhiko Morimoto, Masaru Matsui, Kenichi Samejima, Kazuhiko Tsuruya.
Diabetes, Obesity and Metabolism First published: 03 November, 2023

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに腎臓病態制御医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和6年3月5日

学位審査委員長

臨床神経筋病態学

教授 杉江 和馬

学位審査委員

臨床実証医学

教授 笠原 正登

学位審査委員(指導教員)

腎臓病態制御医学

教授 鶴屋 和彦